日常は波乱がいっぱい！！

HERMES

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日常は波乱がいっぱい！！

【Ｎコード】

Ｎ１０３５Ｅ

【作者名】

ＨＥＲＭＥＳ

【あらすじ】

高校生活二年目の夏休み明け、部室に行くと後輩と先輩が揉めている！そこに俺が火に油を注いでしまい、話は思わぬ方向に！！のんびり気長に投稿していこうと思ってます。

プロローグ（前書き）

小説を投稿するのは初めてですのでっす！
小説自体も稚拙だとは思いますが楽しんでいただけたら幸いです★

プロローグ

中学二年のある日、俺は悪友に頼み込まれ学校をサボり、他校の――悪友の彼女が通う学校開かれる文化祭についていった。

悪友の彼女は学校では軽音楽部に所属しているらしく、文化祭でも体育館で演奏するとか。

その彼女はその部ではボーカルを務めているとかで、いつも自分の彼女の声は綺麗だの、どこぞの有名アイドルの名前を引っ張り出しては自分の彼女の方が歌がうまいだのと自慢ばかりしている。

それに付き合う俺も俺なのだが、それでも誇らしげに自分の彼女を誉めているときの生き生きとした表情を見ると口を挟むことができず、ただただひたすら耳を傾けてやっている――時には聞き流してることもおあるが。そして今日も俺はこの悪友に付き合って、隣町のこの学校に来た。

しかし、俺の悪友には計画性がまるでなく軽音楽部が何時に体育館で演奏するかを事前に調べてはいなかった。

仕方なく俺と悪友は体育館の中で時間をつぶすことにした。

窓には暗幕がかかり外界の光は遮断されている。点けられているライトといえば、舞台を照らす照明だけ。

否が応にも俺の視線は舞台に向く。

そこで俺の瞳は舞台の中心、正確には舞台の中心に立つ騎士風の

衣装に身を包んだ人物に釘付けになった。

そこだけがキラキラと輝いているような錯覚を覚え、そして気付いた。

周りが、その中心に立つ人物の周りがそれを生み出しているのだと、一人一人のその役柄がその中心に立つ人物を際立たせているのだと分かった。

俺は生まれて初めてといってもいい感動を味わった。

今まで見てきた劇とは何もかもが違って見えた。

今まで見てきた劇はせいぜい学校のクラス内で行う、真剣実に欠ける、照れや恥ずかしさで萎縮した、ただのままごとのように見えたのだ。

しかし、この演劇は皆が皆、真剣にその役柄を忠実に再現しようとしている。

何かを作るとはこのようなことをいうのかもしれない。

一人一人力を併せて始めて出来上がる世界。

たかが中学生の演劇にこれほど心惹かれるとは、自分自身思わなかった。

俺もこの世界の一人になってみたいと思った。

自分の力で作る世界。

プロローグ（後書き）

最後まで読んでくれてありがと〜ゝ（＾◇＾＊）／

第一話：学校へ行こう！

「先生、早く起きてください、学校に行く時間ですよ。早く起きてくださ～い」

とあるマンションの一室でなんとも幼い声が声を大にして叫んでいる。

見た目中学生ほどの少女が椅子に腰掛けデスクトップパソコンのキーボードの上に突っ伏している少年の身体を揺すって声を張り上げている。

突っ伏している少年とはもちろん俺、現在塚ノ森高校在席の二年生の久遠雪（くおんゆき）のことだ。

なんとも寒々しい響き、その上女の子のような名前。自分自身かなり気にはしているのだが、別に嫌いではない。なんてったて親が付けてくれた名前なのだから。

「先生起きてくださ～い」

なんとも情けない声で俺のことを呼ぶのは浅間洋子、今年で二十五歳になるバリバリの社会人――の筈なのだが、前述したとおり、見た目は中学生とはまるで変わらない。

見た目だけでなく中身も同じように幼い・・・・・・というよりは天然の気がある。

「先生、実はもう起きてますね」

しかし、彼女は意外に勘がよく、彼女の前で嘘をつくと八割の確立で見破るからたち性質が悪い。

「おはよう、洋子さん。今日もいい朝だねー」

とりあえず俺は狸寝入りが見破られぬように、なんもわざとらしい挨拶をするのだが。やはりというか当然というか洋子さんは俺のことを睨みつけるだが、見た目が見た目のために迫力に掛ける。

「いつまで寝ているんですか先生」

先程から彼女が俺に対しての呼びかけが『先生』なのかそれは俺が小説家であり、洋子さんは俺の担当編集者だからだ。詳しいことはまた後ほど明らかになるだろう。

とりあえず俺は椅子から立ち上がろうとした――のだが、腰の辺りで激痛が、

「痛(い)てっ！」

「きゃーっ！先生どうしたんですか」

ただ単に椅子の上で寝ていたがために体が硬直してしまっていたのだが、洋子さんは大袈裟に叫ぶ。

俺はとりあえずそれを無視して、ゆっくりと身体をほぐしてみた。

ところどころまだ違和感が残っているが、ひとまず椅子から立ち上がり背後に掛かっている時計を確認してみたのだが、長針は六を

指し、短針は六と七の間を指していた。

「洋子さん、俺の目がおかしくなければ、時間は今六時半に見えるんですが」

怒りに声を押し殺して、それでも目上の人に対するということでなんとか敬語で目の前にいる見た目十四、五歳の女性に訊ねる。

家から学校までは徒歩で行くなら約四五分近くかかるのだが、俺は登校するのにバイクに乗って行くため通学時間に十五分ほどで到着できるため、常に八時に家を出るように心がけている。ついでにいうなら、俺は身支度や朝食より睡眠時間を優先しているために朝起きるのは七時半に目覚ましをセットしている。

なのに、今の時間はいつもよりも一時間も早い。

どういうことなのかと、洋子さんに詰め寄ったところ。

「何言ってるんですか先生、私の朝ごはんを作っていたら完全に遅刻しちゃいますよ」

あまりにも自分勝手な言い方に俺は閉口したのだが。これを言われるのは初めてのことではない。

これまでにも何度かこの家に泊まっていった次の日には決まってこんなことを言ってくるのだ。

なんとか、彼女を無視して二度寝に挑戦してみようとも思ったのだが、洋子さんが許してはくれなかった。

「洋子さんもいい歳なんだから自分の食事は自分でできるようになって下さい」

せめて、文句だけは言っとかないとやってられない。

しかしこれも毎度のことながら、

「ひどいですー、私が料理苦手なのを知ってるくせに」

彼女の言葉には語弊がある。彼女は料理が苦手なのではなく、まったくできない、それはもう破滅的なまでの料理音痴なのだ。

火を使えば全ての食材を炭化させ、調味料を使うと分量を考えずに気分の赴くままに振り掛ける――俺が知る限りでは胡椒のビンを半分まで空にした――し、包丁を握らせると必ずと言っていいほど自分の指を傷つける。

これはもう才能と言っても差し支えないどろう。

俺はとりあえずバスルームで顔を洗い、まだ寝ぼけきった頭に覚醒を促がした。

キッチンに向かうと視界の端で、洋子さんがリビングの長椅子（ソファー）に寝そべりテレビを見てやがった。

俺は何とか手近にあったナイフを投げつけるのを我慢し、冷蔵庫の中に何が入っているかを確認し、そこから適当な物を見繕って、パパッと料理を済ませた。

自分自身まだ覚醒していない頭で無意識のうちに作っていたため、

何をどのような手順を経て完成したのかは説明できないので省かせてもらう。

しかし、自分で言うのもなんだが無意識のうちに料理ができてしまうような男子高生はこの世に二人とはいないのではないか？　それは言い過ぎかもしれないがそれほど多くもないだろう。

俺の場合四年ほど前までは母親が半強制的に家事一般を覚えさせられ、それ以降はいろいろな事情より俺自身がやらざるを得ない状況だったからだ。

俺の両親は四年前に起きた航空機事故により他界し、それからは唯一の親族である祖父の家で世話になっていた。

祖父は父方の親戚で、俺のことをとても良くしてくれていたのだが、祖父もまた俺が高校入学した間なしに亡くなった。医者が言うにはかなり以前から肺がんに罹っていたとか、俺が気付いたのは入学式から帰ってくると、祖父（じい）ちゃんが血を吐いて倒れていたからだ。

半ばパニック状態で救急車を呼び病院に運んで、そこでやっと医者から祖父ちゃんの容態を聞かされた。

俺はとても後悔した。祖父に対して甘えるだけで俺は何もしてやれなかったと涙を流しながらそう言った。

しかし、祖父ちゃんは最後に俺に対してこう言った。

それはもう優しい表情で、

「お前にはこの短い間にいろんなもんを貰ったわい。だから泣くな」

そう言っておれの頭を節くれだった手で撫でてくれた。

それから祖父ちゃんは数分後に息を引き取った。

久しぶりにあのときのことが思い浮かび俺の涙腺が緩んできたのだが、そんな叙情をぶち壊す声が、

「せんせーい、ご飯まだですかー」

リビングの方から間延びした声がとんできた。

慌てて目を擦り何事もなかったように、俺はリビングのテーブルに食事を並べた。

白米に味噌汁、塩鮭に納豆を一人分だけ。

洋子さんは朝食はいつも和食、しかも見た目や言動に似合わず何故かいつも納豆を所望するのだ。俺には何故そんな物を食べたがるのかは全く理解できない。

「納得できません、どうして私が料理できないのに先生はこんなに上手に作れるんですか」

とくに上手には作っていないのだが破滅的な料理音痴の洋子さんはいつも俺の出した食事に文句を言う。

俺は毎度の質問を無視してもう一度キッチンに戻ろうとしたのだが、

「先生、今日はいつもより少し元気ないですね」

俺はその言葉に先程考えていたことがまた頭に浮上しかけたが、何とかそれを押し込め、

「そうですか、いつもどうりのつもりなんですけど、それより洋子さん最近また太ってきたんじゃないんですか」

俺はそう言って話をずらすと、彼女はその言葉にものの見事にひっかかり、怒り出した。

俺はキッチンに戻り手早く自分の朝食を準備した。

準備するとはいっても、洋子さんの朝食みたいに凝ったものではなく、六枚切りの食パン二枚をオーブンに突っ込み、その間にベーコンと目玉焼き、後はちょっとしたサラダなどを適当に皿の上にのっけたものだ。ついでに眠気覚ましの濃い目のコーヒーを入れてテーブルに運ぶ。

「今日から新学期ですねー」

まるで自分が学生のような口振りで言う洋子さん。確かに見た目なため、彼女のことを知らない人が聞けば、夏休みの終わりを嘆く中学生のように見えたことだろう。

「洋子さん今日も仕事ですか」

彼女の言葉を聞き流し、俺は自分が訊きたいことを言う。

うまく彼女の仕事が長引けば、今日こそはのんびり優雅にベットの上で安眠できるのだから、彼女に仕事があるのを願っても仕方が

ないだろう。

彼女はここ最近ずっと俺の家に押しかけては「原稿を～、原稿を～」とひたすら耳元で囁いていたのだ。

必然、夜寝る時間は遅くなり、朝は朝で食事の準備でたたき起こされるのだからたまったものじゃない。

幸い今までは夏休み、彼女のいない間に朝寝、昼寝、夕寝とこっそりと寝ていたのだが、それも今日からは不可能。本日は始業式、学生の本分である勉強が始まるのだから。

「ひょうふぁふぉふぃふぉふぉふぁ、ふぉひゃひゅふぃふぇ～ふ（今日はお仕事は、お休みで～す）」

納豆の乗ったご飯を口の中にかきこみながら言うその言葉と姿に、いろんな意味での失望をして食事をした。

食事後、俺はとりあえず制服――半袖のカッターシャツにネクタイを締め、夏用学生ズボン――に着替え、ショルダーバッグ筆記具を詰め込み学校へ行く準備を整え、そして忘れてはいけない、母の形見である蒼のピアスを片耳につけ、左の手首に父親の形見である腕時計をはめる。

これは事故当日まで母親がよく愛用していた物だ。父から結婚記念日に買ってもらったとかでいつもそれを身に着けていた。しかし、その日だけは別のピアスを付けていき、そして事故にあいこのピアスは家に残されていた。

ピアスの片方は母と一緒に燃やされ、そして片方は俺が現在使っ

ている。

そして、腕時計もまた父がいつもはめていたものだ。

事故当日も時計ははめて行ったのだが、これだけは傷一つなく発見され、両親の遺体と共に返され、父の形見と思って使用している。

感傷に過ぎないとわかってはいても、これらが両親と繋がっているような気がして・・・。

「洋子さんも早く出ってください」

俺は気を取り直して長椅子に座る洋子さんに声を掛ける。

家に泊めるが他人は他人、家主がいないときにまで家の中にいてもらっては困る。以前に一度だけ家に残しておいたときもあったのだが、自宅帰還したらキッチンが分けの解らない汚物がそこら中にへばりついていたのだ。それもたかだか近くのスーパーにきらした醤油を買いに行った僅か十五分ほどの間に。

そのときの彼女の言い訳は「今日は何故か料理が上手にできるきがしたんですよ」だった。

それから俺は洋子さんを一人で家に残すことはしないようにしてる。

「嫌です。今から魔女っ子ウルルさんが始まるんですから」

なんていうかすさまじく胡散臭いタイトルだな。

「二十五の大人がそんなもの見ないでください」

ただでさえ見た目中学生なのに、中身は小学生並みというのはもうどうしようもないね。

「む、私はまだ二十四歳です」

洋子さんでも歳のことには敏感なんだな。

俺は時計を見て、ここで押し問答をしている時間はないと確認する。

この場合俺の取る手段は二つに一つ。実力行使で洋子さんを追い出すか、もしくは俺が諦めて洋子さんをここに残していくかだ。

俺はもちろんここの家主らしく威厳を込めて、

「キッチンには絶対に入らないでくださいね」

俺はそれだけ言って鞄を肩に掛け玄関に向かった。

「せんせ〜い！　私、今日お仕事はないんですけど別の用事でお昼頃に出掛けるんですけど、鍵はどうしたらいいですか？」

このマンションはオートロックではないため外出の際には鍵をかけなくてはいけない。下には管理人もいるのだが少しばかり警備ががさつのためだれそれの知り合いです。と言えば簡単に通してくれるのだ。

「ここに合鍵置いておきますから絶対に鍵閉めて出てくださいね。

じゃー行って来ます」

俺は靴棚の上にカードキーを置いて、代わりにヘルメットを手にとってドアを出た。後方からはいってらしゃ～いという間の抜けた洋子さんの声が響いて消えた。

俺は地下の駐車場に向かい、四年前まで父親が使っていたバイク跨りキーを差込みエンジンを吹かす。

これも腕時計と同じで父親との繋がりを求める物の一つだ。

父親の愛用のバイクで一人での外出時は車ではなくいつもこのバイクを使用してた。

俺は腕時計でまだ時間に余裕がることを確認し、フルフェイスのヘルメットをかぶりバイクを発進させた。

第二話：二度あることは三度ある？

「雛森、久しぶり」

場所は私立鳳仙高校、正門をぬけて駐輪所と駐車場に向かう道。

バイクを――校内でのバイクの乗車は硬く禁じられているため――押している俺に向かって、からかいと親しみを込めた声が掛かかり背中に張り手を食らわせてきた。

振り返るとその、旧来の悪友である姫町馨（ひめまちかおり）が自転車を押しながら近寄ってきた。

「その筆名（なまえ）で呼ぶなっていつも言ってるだろ」

雛森とは俺のペンネーム。正確には雛森恵（ひなもりめぐみ）。ちなみに姓は母親の旧姓を使わせてもらって、下の名前は父親の名前を使わせてもらっている。

こいつはいつもからかい半分で俺のことを雛森と呼んだり恵と呼んだりする。

まあ、だいたいが俺たち二人のときだったりするので実害はないのだが。

俺が作家だというのはこの学校内では隣を歩く馨だけ。

こいつとは中学一年の時に同じクラスになり、ひょんなことで――名前がお互い女の子っぽいという理由で――意気投合し、それか

らは中学二年、三年、高校一年、二年と同じクラスで半ば腐れ縁と化してきている。

実を言うと、小説を投稿したのは馨の勧めがあったためだ。

馨はサッカー部に所属しており。クラブのキャプテンであり、部活内では後輩達の信頼厚き先輩でもある。そして羨ましいことに付き合い始めて四年になる彼女がいるというのに、衰えることのない女性との人気を集めている。

「ハァァァ～」

羨ましさで溜息が漏れた俺に、

「なに溜め息なんか吐いてんだ？」

自転車のスタンドを降ろしながら訊いてくるが、俺は聞こえてない振りをする。

それから俺たちは昇降口まで夏休みにあったたわいもない話をして向かった。

昇降口につき俺と馨が靴箱に靴を突っ込み。上履きに履き替えていると何処からともなく軽快なステップ音が聞こえ、そして――、

「うげっ！」

強烈な衝撃が俺を襲った。

痛い、かなり痛かった。

「ゆっきー、ひっさしっぶりー」

元気の良い。良すぎ声が俺の背後。それも密着状態の零距離からかけられた。

振り向かずとも声の主が誰かは一発で判った。

「久しぶり茉莉。でもお前の熱い包容に耐えられるのは馨だけだ。できれば次からは俺じゃなく馨にしてくれ」

俺の目の前には猫のような少女が笑いながら立っている。

少女の顔立ちはなんというか、猫を思わせる。

目がやや釣り目がちなところや、悪戯が好きそうな表情。それでいて甘え上手なところが猫を、それも飼い猫でなく野良猫を連想させる。

突如現れ俺に抱きつくという甘い言葉でオブラートした強烈なタックルをかました少女の名前は狩野茉莉、俺の悪友の四年来の恋人だ。

「え～、だって、馨とは夏休みの間嫌ってほど会ってたから飽きちゃった」

うわ～、この言葉はかなりショックだろうなー。

後ろを振り返ってみると、案の定馨は打ちひしがれている。見ていて同情を禁じえないな。

自分の彼女にここまで言わせるほど毎日のように会ってたのか？

「冗談だよ。じょ・う・だ・ん。アタシはまだ馨のことは好きだよ」

臆面もなく、こんな公衆の場でこんなことを言えるのは茉莉ぐらいではないのだろうか？

その言葉で馨も復活し。よかったよかったと俺が思ったのも束の間。

「でも～、ゆっきーのことも馨と同じぐらい好きだよ。だから、夏休みの間会えなくて寂しかった」

女の子に、それも美人の部類に入る女の子にこんなことを言われたら悪い気はしない、しかしそろそろ止めないと馨が暴走しそうで怖い。

身体に引っ付いてる茉莉を引っぺがして馨に押し付ける。

茉莉を抱きしめる馨、そして俺にけりを食らわせ一目散に駆け出した。

「キャハハハハハ。ゆっきーまた後でねー」

茉莉のその言葉を残して二人の姿が俺の視界から消え失せた。

半ば八当たりで蹴りを入れられた俺は、本日何度目かの溜息を吐いた。

教室に行くと必然的にまたあの二人に会う。そしてまた茉莉に絡まれ、馨に八当たりされる。

誰か、誰か俺の苦労を肩代わりしてくれる者はいないだろうか。

自宅では半居候の洋子さんにこき使われ、学校ではあの二人に何かと絡まれる。

気苦労が絶えないとはこのことだ。

何処に？　何処に俺の安息の地があるのだろうか・・・・・・。

「・・・・・君？　久遠君？」

鈴を転がしたような涼やかな声が背後からかかる。

今日はよく背中から声をかけられる日だな。張り手にタックル、次ぎは飛び蹴りか？

怖々と振り返るとキョトンとした表情で俺のことを見ている少女が一人。

張り手やタックルましてや飛び蹴りなどしそうもない少女。しかし、張り手やタックルされるよりも俺は驚いた。

後ろに立っていたのは同じクラスの、そして同じクラブに所属する女子生徒、天宮華南（かなん）だった。

艶のある髪を背中の半ばまで伸ばし、白く細いうなじが目に眩しい。

何より彼女の美貌は名高い名工の腕をもってしても彫り起こすことのできない美しさ・・・ってこれは言いすぎかも知れないが、まあそれぐらい綺麗と言いたいわけで。それに加えて性格も明るく、成績、運動神経共に平均よりは抜きん出ている。

ぶっちゃけ彼女は俺の片思い――というよりは憧れであろうか――の相手である。

といっても彼女に想いを寄せるのはなにも俺だけではなく、三年の上級生、二年の同級生、一年の下級生、果ては他校の者まで彼女に目を付けているとかいないとか。これはもう人というよりは甘いケーキに群がる蟻（あり）といっても差し支えないだろう。かく言う俺もそのなかの一匹に過ぎない。

蟻の中にも美醜、優劣、太痩、大小の様々な蟻が居り、中には決死の覚悟でケーキに飛びつこうとするのだが、皆全てあえなく失敗に終わる。

なんだか自分で言ってて悲しくなってきた。

そんな微妙に落ち込み気味な俺に声が掛かる。

「大丈夫、久遠君？」

「え？　あ、ごめん、何？」

俺としたことが天宮さんいたことを失念していた。

「ううん、なんかボーっとしてたから大丈夫かなって思って」

「大丈夫、大丈夫。ちょっと考え事してただけだから」

「そう？　それなら良かった」

良かった？　それはどういう意味で何が良かったんだ？　俺が考え事をしていることが？　いやそれはないだろう。じゃー俺の身体を心配してくれたのか？　それなら喜ばしいことこの上ないな。

と、勝手な理想、いや夢想か？　まあどっちでもさして変わらないな。

っていうか、俺はいつまでここに立ち尽くしてるつもりだ？　できればこのまま天宮さんと教室まで一緒に行きたいのだが、俺にはそんな勇気も度胸もない、だってさっきから何人もの男子生徒の視線がいくつもこちらに向けられている。

視線の大半は俺の横にいる天宮さんにそして、他は俺に。

天宮さんを見る目は熱烈な恋する瞳――ちょっと自分で表現して腕に鳥肌が立ってきた――に対して俺に向けられるのは嫉妬と憎悪の熱烈な視線。これは恐らく同属嫌悪からくるものだろう。

この視線の集中砲火を浴びて気軽に彼女と話せる男（やつ）は馬鹿か大物のどちらかだ。

俺はそそくさとその場を後にした。

二年の教室は三階にある。上るのにはかなり気が滅入る回数だ、しかもそれが夏ならなおさらだ。

足取り重く階段を上る。まさに気持ちは絞首刑に臨む犯罪者の気分。

そんな鬱気分の俺に階下から涼やかな声が、

「久遠君」

ちょうど俺が一階と二階の折り返し地点にある踊り場に差し掛かったところだ。ほとんど反射的に振り返り、声の主が自分の想像したとおりの相手だったことに俺は嬉しくも思い、少しの驚きも感じた。

「何？　天宮さん」

俺と彼女はそれほど親しいというわけではない、ただクラスが同じで部活が同じというだけで、それほど会話らしい会話をしたことがなかったけらだ。

「後ろにいると思ったら先に行っちゃてるんだもん、待っててくれてもいいじゃない」

そう言って階段を一段ずつ上ってくる。

彼女が俺との距離を縮めるにつれて、男子生徒の視線が増え、負の感情が入り混じりだした。

はっきり言ってかなり怖い。

なのに、この視線の根源でもある天宮さんはまったく気付いていないのだか羨ましいことこの上ない。

しかし、この鈍感さも俺は結構――

「きゃっ！」

と、そんな思考を断ち切るような、短くか細い悲鳴が俺の聴覚を刺激する。

天宮さんが最後の一段で躓き、前のめりに倒れこんできた。

「うわっ、と！！」

俺はとっさに天宮さんを抱きとめる。

ナイスキャッチ。見事天宮さんを受け止めることに成功。周囲からは天宮さんを助けた俺に向かって、賞賛するかのように熱い視線が・・・・・・ん？　熱いというよりも灼熱といっても差し支えない気が――

辺りを確認。

周囲には睨むような――ここでおれが『ような』と使ったのは、睨んでいるわけではないという理由からではなく、睨み殺さんばかりの視線だったからだ――視線で俺を見ていた。

何故だ？

とりあえず状況確認だ。

まず、俺の腕の中には少女が一人・・・・・・ってそれだけ確認できれば十分だ。傍から見れば俺が抱きしめてるみたいじゃないか。いや間違いではないのだが見え方というものがあるだろう。

そんでもって、自覚したがために心臓が早鐘のように鳴り出す。

あ、なんかいい匂いがする・・・・・・ってやばい。

「大丈夫か？」

自制心を総動員し、可能な限り平静を装い、ゆっくりと密着した身体を離す。

「あ、ありがとう」

俯き気味に消え入りそうな声での返事。聞き逃してしまいそうだったけどしっかりと俺には聞こえた。

「どういたしまして」

受け止める際に肩からずり落ちた鞄を掛け直す。

「それで俺に何か用」

わざわざ追ってきて呼び止めたのなら、なにか理由があるのかな？

「えっ、あ、そうなのさっき速水部長に会ったの」

げっ、速水部長！　新学期早々嫌な名前を聞いてしまった。

「どうしたの？」

「いや、なんでもない。それで」

「うん、それでね。今日は文化祭の為の大事なミーティングをするから、絶対に休まないように、って」

それはきっと君を呼ぶための口実だと思うよ。口には出さず言ってみる。

「それとね、新竹先生が学校辞めちゃったでしょ」

何故にここで古文教師の名前が出るんだ？

「それでね。今日から新しい顧問の先生が来るんだって」

「どうして新竹が辞めたら、新しい顧問になるんだ？」

「え？」

まずいことといったか俺。

「久遠くん、新竹先生がうちの部の顧問だったのもしかして知らなかった？」

マジで！　っていうかうちの部に顧問なんかいたのかよ。ってそりゃーいるだろうけど。あのじーさんが顧問かよ。

一年近く休まず部活には出てたけど一度もアイツ顔出したことなんてなかったぞ。

「あ、新しい顧問ってどんな人かなー」

強引にでも話を逸らしたい。ちょっと強引する気もするがこの際目をつぶって。

「女の人らしいって。あと他にもＯＧの人が一人来るみたいなの」

心なしか天宮さんの声が弾ん出るような気がするのは気のせいか？

「なんか嬉しそうだな」

「えっ！」

思ったことを言ってみただけだが何故そんなに驚いた表情をするんだ？

「違った？」

「ううん、嬉しいよ。だって今度の先生はちゃんと指導してくれそうだし」

そう言われればそうだな、今までの顧問はＯＧを呼ぶどころかろくに顔さえ出さなかったのだから、それを思えば確かにいろいろと期待できるかもしれない。

でも、厳しすぎるのはちょっと遠慮願いたい。

そんなこんなで数分後俺と天宮さんは三階の二年F組と書いたプレートを掲げる教室の前に到着した。

たわいもない話――全てが部活のこと――をしながら教室まで行くという小さな、ちょっと小さすぎる願いがかなったことに感動しつつ、俺は教室のドアを開け――

スパァアアン！

開いたドアを力の限り閉めた。

「ごめん、天宮さん、ちょっと気分が悪くなった。保健室行ってくる」

驚いた表情の天宮さん。彼女をここに残していくのは非常に心苦しい、けど行かねば、

「裏切り者には死をー！」

殺られる。

教室から流出する男共（彼女なし）が殺気を迸らせて追ってきやがる。

当然俺は脱兎のごとく逃げ出した。

第三話：運動後は休息が必要。（前書き）

今回は少しばかり短めです。
まあ、今までも長いとは言いがたいですが。

第三話：運動後は休息が必要。

「くっくっくっく」

さっきからずっと続いている、押し殺した笑い。

聞いてて気分のいいものではない、何故なら笑いの対象が俺だからだ。

「いい加減にしろよ」

「クックック、だってな。クッハハハハハ」

俺の方を向いて大爆笑馬鹿笑い。

笑いの主は俺の後ろの座席に座る馨が笑っている理由は自分でも解っている。それは今現在の俺の格好と先程まで続いていた逃走劇だ。

クラスメイトの男子に追われた俺はひたすらに逃走していたら、いつの間にか追う人数が倍以上に膨れ上がっていのだ。

おそらく他クラスの生徒や他学年の生徒が加わってひたすら追われまくった。追ってくるのが皆女の子なら大歓迎なのだが・・・・・・それほどこの世の中は甘くない。

俺はまず階下に逃げ逃げ道がなくなると今度は階段を駆け上がり、校舎内を逃げ回った。

だが、数の差には勝てず最後には逃走劇の原点であるＦ組の教室に追い詰められた。

絶体絶命大ピンチ。このまま窓から逃げようか。

ここは三階、飛び降りれば大怪我は必至。だが、幸いなことに窓の外には樹齢云十年の立派な大木、枝ぶりもなかなかしっかりしてる、木を伝って降りればさすがにもう追っては来ないだろう。

半ば本気で窓から逃げようと思ったのだが、神はまだ俺を見捨ててはいなかった。

キ～ンコ～ンカ～ンコ～ン

校舎中に響き渡るチャイムの音。それと同時に教室のドアが外側から開かれる。もちろん入ってきたのはこのクラスの担任教師、東隼人（はやと）。

このときほど彼が自分の担任でよかったと心から思えたことはない。

時間と男子にはやたら厳しく、女子にはめちゃくちゃ甘い、天性のフェミニスト。

少し目つきはきついがかなりの美形なため、女子には絶大な支持を集め、男子からの批判の声は高い。

「ん？　貴様等は俺のＳＨＲ（ショートホームルーム）の時間を邪魔しにきたのか」

鋭く威圧する眼光。

殺気迸らせる生徒もさすがにたじたじ。皆ぞろぞろと教室を後にする。

しかし中にはあからさまに残念そうな顔をする者――おそらく下級生だ。舌打ちする人――きっと上級生。諦めきられいというような表情をする奴等――絶対同級生だ。げっ、一年の時に同じクラスだった奴までいやがる。

★　☆　★

そして、現在に至る訳だが。

校内を走り回ったおかげで、汗は掻くし、髪も服装も乱れまくり、なおかつそれらに気を遣う余力もない。

疲労困憊ノックダウン。動く気も失せる。

そんな俺を見て、親友だと思っていた馨は腹抱えて笑いやがる。血も涙もないのかこいつには。

「雪、お前あのままチャイムが鳴らなかった窓から逃げるつもりだっただろ」

「・・・・・・ああ」

「そんなことしたら絶対、大騒ぎになってたぞ」

「そう思うなら助けろよ」

「・・・・・・悪い、俺も命は惜しい」

真面目な顔して言ってんじゃねー。この薄情者。

「ハアァァァアア～」

今日三度目の溜息。

「馨」

「ん？」

「始業式の間、俺ここで寝てるから帰ってきたら起こしてくれ」

本日の睡眠時間約三時間。そのうえ無駄に走り回ったせいで体が休息を求めてる。

「学校に何しに来てんだよ、お前は」

「我が麗しの女神の御尊顔を拝みに。っておいその憐れむような目は」

「・・・・・・いや、別に」

まあいいか。机に直接寝るのはちょっと据わりが悪いな。・・・・・・枕代わりに鞄でも敷くか。

――ものの数秒で睡魔が襲ってきた。そして数瞬のまどろみの後に俺はあっさり困睡した。

だから俺は気付かなかった。背後で親友の顔が悪戯を思いついた子供のような顔をしていたことを――。

第三話：運動後は休息が必要。（後書き）

今まで投稿していたのを見直しました。
フリガナがおかしなことになって、読めたものではなかったですね・・・。
次回からは投稿前にしっかり確認するよう勤めます。

第四話：仲裁するつもりが・・・。

――ユッサユッサ・・・・・・ユッサユッサ

「ん・・・う～ん」

俺のささやかな安眠を妨害する奴は誰だ。無視だ、無視。

――ユッサユッサユッサ・・・・・・

しつこい、ここは一発ガツンと言って追い払おう。寝惚けた頭を半覚醒状態に持っていき顔を上げ、

「いいかげんに・・・し・・・・・・ろ」

相手の顔を見て俺の言葉は尻すぼみになって消えた。

天宮さんが驚いたような顔で固まってる。

「え、あ、ご、ごめん、何？」

頭の中がパニック寸前。なんで天宮さんが俺を安眠妨害を？　ってそうじゃない、馨はどうした馨は、あいつに目覚まし頼んだはずだぞ。

「馨くんが用事があるから久遠君を起こしてくれって」

周りには数人の生徒が談笑して、半分以上は教室にはいなかった。

そして、いなくなった生徒の机には鞄の既にない。

「聞いていいか。学校はもう終わったのか？」

「うん、ついさっき終わったよ」

「・・・・・・」

馨の奴用事があるだと、俺は始業式から帰ってきたら起こせって言ったのに、何を聞き間違って学校が終わったあと天宮さんに起こさせることに――

「久遠君そろそろ部室に行かなきゃ遅刻になるわよ」

グッドジョブ馨。さすが俺の親友だ。

天宮さんに起こしてもらえたうえに、部室まで一緒に行けるなんて天にも昇る心地。

「久遠君行くよ」

いつの間にか天宮さんが廊下に出ている。

「今行く」

枕代わりの鞄を肩に掛けて天宮さんに追いつく。

「天宮さん、起こしてくれてありがと」

「どういたしまして」

思わず抱きしめたくなるほど愛らしい微笑み。

抱きしめると言えば朝方も似たような会話をしたな、今とは反対の台詞だったけど。

「朝とは反対ね」

天宮さんも同じことを考えてたようだ。

「そういえば今朝はすごかったわね、鬼ごっこみたいだった」

鬼ごっこというには語弊あるぞ、あれは。

鬼ごっことは一人の鬼が複数の人間を追いかけて楽しむものだ。決して複数の鬼が一人の人間を鬼気迫る表情で追い掛け回すものではない。

「ああ、すげー怖かった」

「久遠君、何かしたの？」

したと言えばしたし、してないと言えば何も悪いことはしてない。

おそらくきっと絶対、原因は階段での天宮さんを抱きしめたことにあるだろう。でも、彼女にそれを言っても納得してくれないだろう。まあ話す気もないが。

「皆暇だったんじゃないかな」

「そうなんだ」

「そういえば新しい顧問ってどんな人だった？　始業式で自己紹介かなんかあったんだろ」「たぶん女の人だと思うけど」

「美人？」

「・・・・・・」

なんか天宮さんの雰囲気が変わったような。表現するなら『むっ』って感じだ。

「綺麗な人だったよ」

一転笑顔で返事をしてきた。でも、なんかすごみのある笑顔だ。

女としての嫉妬か、いやー天宮さんに限ってそんなことはないだろう。嫉妬する必要もないぐらい可愛いし。でも、本人に自覚はないからな。それでも彼女が相手を羨むことはあっても相手に対して嫉妬や僻むようなことはしないだろう。性格上。

まあ男の俺に女の子の気持ちを推し量ることはできないな。

――数分後

部室棟へ到着。

この部室棟、又の名を旧校舎は二、三年前まではここが本校舎として使われていたのだが生徒数の増加に伴いこの校舎では少し狭す

ぎるのではという意見がでたために、空いているスペースに新しい校舎が建てられたのだ。そして、残された旧校舎は現在、主に文化系のクラブが収容されている。

そして、俺の所属するクラブもこの部室棟にある。

二階の階段に隣接した教室、元は『一年三組』と書かれたプレートが掛けられていた教室には、現在『演劇部』と書かれたプレートがぶら下がっている。

一月半振りに訪れたこの場所だがこれといって変わったとこはないな、たとえば窓が割れてるとかドアが外れてるとか。

「もう誰か来てるかな」

うーん、来てるんじゃないかな。俺寝てたし、そのぶん時間とってるし、それに室内(なか)から――

「一年の分際でこの作品の何がわかる！」

怒声と罵声のミックスブレンドが聞こえてくるし。

少なくとも二人以上の人はいるんじゃないかな。怒る人とその怒りをぶつけられる人が。「天宮さん、どうしようか？」

この場合入るタイミングが大切だ。

ガラガラガラッ

ドアがオープン。もちろん開けたのは天宮さん。躊躇も迷いも一

切なく平然とドアをくぐる。

うっ、ここで入らなきゃ男が廃(すた)る。ドアをくぐるとやっぱりね。複対視線がこちらを注目している。

俺が見たところ部屋の中には何人かの上級生と二人の下級生が対峙している。とは言っても本当に対峙してるのは二人だけ。三年の男子生徒と一年生の女子生徒。あとはそれを見守るギャラリーでしかない。

「ん？」

この諍いの中心人物の一人、部長の速水が今始めてこちらに気付いた。

「やあ華南くんよく来てくれたね、待ってたよ」

俺は無視かよ。ってゆーか待ってたっていう雰囲気じゃないだろ。

「雪先パーイ」

こちらには可愛らしい少年――これが少女だったらどんなにいいことか――が寄ってくる。

彼の名前は如月遥(はるか)。

少女と見紛う美少年、まだかなり幼さが残っている。どれぐらい幼いかというと電車を子供料金で乗れてしまいそうなほどに幼い。声もそれほど低くないため女の子に間違えられることがたびたびあるとか。本人かなり気にしてる。

「遥、氷咲(ひさ)ちゃん何したの？」

氷咲ちゃんとは速水と言い争っていた少女――相模氷咲(さがみひさき)の事だ。彼女は今こちらの方をじっと睨んでいる。

艶のある黒色(こくしょく)の髪が腰の辺りまで伸びている。顔も整っているのだが少し目が鋭すぎるところがあり、それゆえに彼女には少女としての儚さや脆さよりもどちらかと言えば凛々しいと言う表現や雄雄しいという表現の方がしっくりくる。それでいてミステリアスさや神秘性も兼ね揃えている。

天宮さんが皆に光を与える太陽だとすれば氷咲ちゃんは真夜中に人を誘う魔性の月のようだ。

「えっと、氷咲ちゃんが、部長が作った文化祭で使う台本が気に入らないって――」

氷刃ちゃんの足元にはおそらくは台本であろう物が落ちている。そこから導き出される結果は、

「氷咲ちゃんが、床に台本を叩きつけた？」

「雪先輩、すごいですよくわかりましたね」

これは速水がキレるのもわかる気がする。

「氷咲ちゃん、床に叩きつけるのはやりすぎじゃないか」

ちょっと先輩らしく言ってみたのだが効果はゼロ。それどころか

こちらを見る目が多分に鋭くなっただけ。

やっぱり嫌われてるのかな？

「おい」

澄んではいるが、どことなく怖い氷咲ちゃんの声。そして、目の前には先ほどまで床に落ちていた台本が突きつけられた。

条件反射にそれを受け取る。これを読めと？

「久遠君私にも見せて」

後ろから天宮が覗き込んでくる。きっと速水から逃げてきたんだな。

うっ、首筋に息が掛かる。平常心だ、平常心。

改めて台本の表紙を見ると、くっきりはっきりと靴の底の跡が残ってる。

「・・・・・・」

ちょっと速水に同情してもいいかも。

表紙には靴跡以外にこの台本のタイトルがついていた。『Ｔｒａｇｉｃ　Ｌｏｖｅ』と。

ちょっとムカッ――

とりあえず顔には出さないように努(つと)めて、内容(なかみ)を読む。覗き込んでる天宮さんが読み終えたかどうかページごとに確認しつつ、読みつづける、そして最後のページを捲りおえて、

「どうだね？　二人ともこの僕が夏休みを掛けて手がけて生み出した作品は」

「部長、ゴミ箱はこの部屋に置いてましたっけ」

「ん？　ゴミ箱かね、それなら――ほら、そこに」

俺の後ろを指差されて、確認。

そして、それめがけて手に持っていたものを――ズコンッ――ナイッシュ。

見事に台本がゴミ箱に入った。

「ななななななな――」

唖然、呆然、驚愕、みんなが驚いて俺を見た。付け加えるならば、いつもに睨んだような目でしか俺を見ない氷咲ちゃんまで驚いた顔して俺を見た。ちょっと嬉しいかも。

「何をするんだね！」

さっきから『な』を連呼していた速水がやっと日本語を話した。それでもって顔は怒りで真っ赤か。

「部長あれって明らかに盗作ですよね。まあ高校生の演劇に使う程

度ではそんな事言われるとは思いませんけど。それでもあれを自分が生み出したなんていっちゃ駄目ですよね」

氷咲ちゃんが頷いてる。

「まあそんな事はどうでもいいんですが。それより内容が少しアレンジが加えられてるけど、良くなるどころか悪くなってますよ。この本のタイトルは『Ｔｒａｇｃ　Ｌｏｖｅ』なのに、さっきの台本は要らないアレンジのせいでさながら喜劇。こんなの雛森恵が知ったら名誉毀損で訴えられますよ」

一息にそう言った。

『Ｔｒａｇｃ　Ｌｏｖｅ』――これは雛森恵（俺）の処女作であり、現代に蘇ったロミオとジュリエットとかなんとか、世間でかなりの反響を呼んだ。それがだいたい四、五年前の話なのだがいまだ人気は衰えてはない。

「俺はこんな喜劇を発表するのは反対です」

「私が生み出した作品がととと盗作だと！　きき喜劇だと」

「そうですね、こんなの読んだら雛森さんもきっと同じことを言うと思いますよ」

その言葉で我が意を得たりというようにニヤリって感じに笑いやがった。

「ふん、それはないね」

「どうしてですか」

「それはね君、君みたいな無知な者と違って、雛森恵先生は僕の作品の良さをしっかり理解してくれるはずだからね」

いや、本人が気に入らないって言ってるんですけど。

「ふん、君たち二人に意見を求めたのがそもそもの間違いだったようだ。華南君、君ならこの作品の良さを理解してくれたことだろう」

期待を込め天宮さんに迫るのだが彼女はちょっと困り顔。そりゃ困るだろうな。

そしてそれを止めたのは突如現る闖入者と珍入者！？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1035e/

日常は波乱がいっぱい！！

2010年10月28日03時36分発行